

近年のムガル帝国論について

# 近年のムガル帝国論について

近 藤 治

## はじめに

最近の海外のムガル朝史研究の動向を見てみると、史料文献を刻明に読んでなされた実証的な基礎的研究の分野が弱く、得てして解釈論的研究に走っている面が強くなっているように思われる。しかしこうした傾向は、研究分野が多面化し、各分野においてさまざまな研究成果が発表されるようになってきた現在、ある意味ではやむをえないことかもしれない。

近20年くらいの時間幅をとってふりかえてみると、その間に豊かな実証に裏付けられた注目すべき研究の発表されてきたことも事実である。本稿では、先ずはじめにこうした近20年くらいの間に発表されてきた研究のなかから5点を取り上げて刊行順に紹介することにする。次いで、イルファン・ハビブ教授とともにムガル朝時代のインド史研究を牽引してきたジョン・F・リチャーズ教授の研究を紹介することにする。さらに、ムガル帝国論について述べる際に避けて通ることのできぬアクバルについて、この豊かな資質に恵まれた優れた政治家が実は幼少期に学習障害（learning disabilities）の体験者であったことを明らかにしておきたい。

## 1 近年の注目すべき研究

ここ20年ほどの間に発表された注目すべき研究として先ず挙げられるのは、ジョン・F・リチャーズの『ムガル帝国』（John F. Richards, *The Mughal Empire*, The New Cambridge History of India I・5, Cambridge : Cambridge University Press, 1993）である。著者リチャーズはアメリカ、ノースカロラ

イナ州ダラムのデューク大学教授で、「新ケンブリッジ・インド史」全巻の編者の一人でもある。彼の著したこの『ムガル帝国』はムガル朝の成立から1720年ごろに至る歴史過程の政治、経済、社会、交易や領土拡大、反乱、皇位継承戦等の宗教・文化・芸術を除く諸テーマについてバランスよく包括的に論じた研究書である。とりわけ第3章「独裁的中央集権制」では、ムガル朝統治体制に関する簡潔明解な説明を見事に提示している。

もう一人のアメリカ人研究者、トゥーソンのアリゾナ大学教授リチャード・M・イートンの『イスラームの興起とベンガル辺境』(Richard M. Eaton, *The Rise of Islam and the Bengal Frontier, 1204-1760*, Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1993) も注目される研究であった。この研究によると、東ベンガル地方が本格的に開発されたのは17世紀のシャージャハーン、アウラングゼーブ時代以降18世紀半ばにかけてのことであった。ムガル朝はこの地方の森林・沼沢地の開発を積極的に奨励し、樵夫と牛耕者を対にして送り出し、これに軍隊の後方支援隊をつけて援護させた。牛耕用の犁は政府から提供を受け、開墾後2年ないし3年でその代金を返納するものとされた。また開墾地の税負担額は土地1 बीーガー (約2.4反) 当たり1アーナー (16分の1ルピー) という格安の税率であり、開墾者はその土地の所有者 (zamindār) として認められることになっていた。

イートンによれば、イスラーム教徒の開拓者たちには宗教上の長老 (shaikh) が配される措置がとられた。長老たちは入植の先導役を果たし、入植地にモスクを建てて宗教上の指導者となった。彼らに無税・永代利用の恩賞地 (madad-i ma'āsh) として認定された土地は突出して多かった。こうした背景から、早期から開発・開墾の進んでいた西ベンガル地方ではヒンドゥー教徒が多いのに対し、遅れて17世紀ないし18世紀に開発の進んだ東ベンガル地方ではムスリムが多数派を占めることになった、という<sup>(1)</sup>。

次はイルファン・ハビーブの『ムガル朝インド土地制度史』改訂版 (Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India (1556-1707)*, 2nd, revised edition, New Delhi : Oxford University Press, 1999) である。この改訂版は初版(1963年)を綿密に点検しなおし必要などころには大幅な増補を行ったもの

である。この書は初版刊行以来、ムガル朝史研究者はいうに及ばず、広くインド史研究者たちに多大な影響を与え続けてきたものであるが、改訂版には初版刊行以後に発表されてきた多くの史料文献と研究文献を踏まえた入念な改訂作業が加えられ、これによってムガル朝経済史研究のための基本書としての面目を改めて新たにしている。

この改訂版が初版と最も大きく異なるところは、著者自ら序文で明らかにしているように、インド村落共同体に関する記述のところでである。しかしそれに止まらず、分音符の全編にわたる採用や詳細を極めた注記の書き替え、要領を得た解説付きの文献目録や巻末補遺の増補など改訂は全面に及んでおり、この書の多面的な利用価値をさらに高めている。長らくインドのアリーガル大学の重鎮的教授として高名を博し、現在はその名誉教授となっているバビーブの膨大な著作目録は、彼に献呈された論文集の第3版の巻末に最新のもののまで含めて収載されている。<sup>(2)</sup>

オランダ、ライデン大学のジョス・ゴマンス教授の『ムガル朝の戦闘部隊』(Jos J. L. Gommans, *Mughal Warfare : Indian frontiers and high roads to empire, 1500-1700*, London and New York : Routledge, 2002) も注目される研究である。彼の研究によると、ムガル朝皇帝の率いる軍隊の行軍速度は1日16キロメートル程度であった。行軍後の軍営における休息日を1日ずつ配すると、行軍速度はその半分の1日平均8キロメートルとなる。このスピードで皇帝軍が5ヵ月間行軍するとおよそ1200キロメートル離れた地点まで遠征することができることとなり、帰路もまた同様のスピードで行軍するとすれば皇帝軍は10ヵ月後に都へ帰還することが可能である。しかしさらに目的地の遠征先に2ヵ月間の滞在予備期間を見積もると、丁度1年間程度で皇帝軍はデリーやアーグラの都と遠征地との間を往復することができる。このように計算したゴマンスは、西北部ではカーブル、東部ではラージマハル、南部ではイスラームブリー(ブラフマブリー)がこうしたデリーから1200キロメートルの範囲内に位置しており、実はここまでの範囲がムガル朝皇帝自ら率いる皇帝軍の遠征限度であった、と考えるのである。

軍隊の移動と集中は地形や季節、遠征の目的等によってその行軍期間が異な

ることは当然である。大部隊の皇帝軍の場合、これらの条件によって受ける影響がさらに大きいことは想像するに難くない。しかしこうした点を考慮に入れるとしても、ゴマンズがこの書で行った指摘は、ムガル朝の最大版図を考える上で斬新なヒントを与えてくれることは間違いないであろう。ただし各地に赴任していた高官たちが宮廷への呼び出しを受けた際は1日平均して30キロメートル以上の速度で帰還することが要求された。また駅通制の速馬の伝令は1日125キロメートルの猛烈スピードであったことも、ゴマンズは紹介している<sup>(3)</sup>。

もう一つの研究書は、ニューデリーのジャワーハルラール・ネルー大学教授で学長もしていたハルバンス・ムキアの『インドのムガル朝』(Harbans Mukhia, *The Mughals of India*, Oxford: Blackwell Publishing, 2004)である。この書は一般読者への啓蒙書として書かれたもののようで、政治と宗教、儀礼、皇室世界、宮廷文化の4章によって構成されているに過ぎないが、叙述は平易かつ精細であり、脚注・巻末文献目録・索引は充実していて全体に引き締まった感を与えている。ムキアは冒頭部で「ムガル」なることばについて、18世紀の歴史家ハーフィー・ハーン(Khāfi Khān)の『精華選粹』(*Muntakhab al-Lubāb*)の叙述を引きながら、それがアクバル時代以降に非アラブ系地域(アジャム)のトルコ人やタジク人の謂として広く使われているようになるが、実のところは蒙古系貴族(Mughal khān)に起源を有するトルコ族にのみ当てはまるものである、とのハーフィー・ハーンの指摘を紹介している。

デリー・スルターン朝の成立から18世紀半ばに至る5世紀半の間に、今日のウッタラプラデーシュ州やビハール州のような政権興亡の舞台となった地域においてさえ、ムスリム人口が全体の15パーセントを越えるようなことはなかった、とムキアは見る。そしてリチャード・イートン等の研究を引きながら、上記の期間中に発生したヒンドゥー寺院の破壊件数は80例に過ぎなかったこと、逆にヒンドゥー教徒がモスクを破壊してその跡地にヒンドゥー寺院を建立した事例がいくつか見られることを指摘している。またムスリムからヒンドゥー教徒への改宗や改宗ムスリムのヒンドゥー教徒への再改宗の事例、23人のムスリムのヒンドゥー教徒への集団改宗の事例なども紹介している。そしてイスラーム法シャリーアがムガル朝国家統治の基本に置かれてはいたが、結婚・家庭生

活・財産処分・遺産相続など民衆の生活に直接かかわる民法分野においては、各宗派集団の法典に拠って執行されていたことについても説明している。かくしてムキアは、ムガル朝時代の社会秩序が階層性の原理に従って形成されていたけれども、その階層性は個人の特性や能力を受け入れる余地のある柔軟性を備えたものであった、と見る。<sup>(4)</sup>

以上、ジョン・F・リチャーズ、リチャード・M・イートン、イルファン・ハビブ、ジョス・J・L・ゴマンズ、ハルバンス・ムキアの5人の学者たちの注目される研究書を1冊ずつ取り上げ、そのなかの特徴的な主張点を極く簡単に紹介した。そのうちのリチャーズの近業について、特にその近世論<sup>(5)</sup>に焦点を絞りながら、次節においてやや詳しく見ていくことにしよう。

## 2 ジョン・F・リチャーズの論著から

はじめにジョン・F・リチャーズの論著のうち、比較的新しいものを中心にして私の目にしたものを一括して挙げることにしよう。

- ① *Mughal Administration in Golconda*, London : Oxford University Press, 1975.
- ② “Mughal State Finance and the Premodern World Economy,” *Comparative Studies in Society and History*, 23—2, 1981, pp. 285–308.
- ③ (Ed.) *Precious Metals in the Later Medieval and Early Modern Worlds*, Durham : Carolina Academic Press, 1983. この編著には彼の解説 Introduction, pp. 3–26と論文 “Outflows of Precious Metals from Early Islamic India,” pp. 183–205 を収める。
- ④ With James R. Hagen and Edward S. Haynes, “Changing Land Use in Bihar, Punjab and Haryana, 1850–1970,” *Modern Asian Studies*, 19—3, 1985, pp. 699–732.
- ⑤ *Documents Forms for Official Orders of Appointment in the Mughal Empire : Translation, notes and texts*, E. J. W. Gibb Memorial Series, new series, 29, Cambridge : E. J. W. Gibb Memorial Trust, 1986.
- ⑥ (Ed.) *The Imperial Monetary System of Mughal India*, Delhi : Oxford

University Press, 1987. Introduction, pp. 1-12 ; “Official Revenues and Money Flows in a Mughal Province,” pp. 193-231.

- ⑦ *The Mughal Empire*. 第1節で紹介。
- ⑧ *Power, Administration and Finance in Mughal India*, Aldershot : Variorum, 1993.
- ⑨ “Early Modern India and World History,” *Journal of World History*, 8, 1997, pp. 197-209.
- ⑩ (Ed.) *Kingship and Authority in South Asia*, Delhi : Oxford University Press, 1998, 1st edition, Madison : Center for South Asian Studies, University of Wisconsin, 1978. Introduction, pp. 1-12 ; “The Formulation of Imperial Authority under Akbar and Jahangir,” pp. 285-326.
- ⑪ “Only a World Perspective Is Significant : Settlement frontiers and property rights in early modern world history,” in *The Humanities and the Environment*, ed. by Jill Conway, Kenneth Keniston, and Leo Marx, Cambridge, Mass. : MIT Press, 1999, pp. 102-118.
- ⑫ (Ed.) *Land, Property, and the Environment*, Oakland : Institute for Contemporary Studies Press, 2002. Introduction, pp. 1-11 ; “Toward a Global System of Property Rights in Land,” pp. 13-37 ; with Meena Bhargava, “Defining Property Rights in Land in Colonial India : Gorakhpur region in the Indo-Gangetic plain,” pp. 235-262.
- ⑬ *The Unending Frontier : An environmental history of the early modern world*, Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press, 2003.
- ⑭ “Toward a Global System of Property Rights in Land,” in *The Environment and World History*, ed. by Edmund Burke III and Kenneth Pomeranz, Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press, 2009, pp. 54-78.

これらの論著のうち最初に挙げた①の著書は、彼がカリフォルニア大学バークレー校に提出した学位請求論文を公刊したものである。アウラングゼーブは

1686年から翌年にかけてデカン地方のビジャープルとゴールコンダを相継いで征服し、ムガル朝の版図を最大限にまで拡大していったが、それはまたムガル朝統治体制のつまずきの始まりでもあった。これについてリチャーズは次のように述べている。「アウラングゼーブが即位以前からささ抱いていた野望は、ムガル朝の直接的な統治世界の拡大を、さまざまな貢納者の有力諸集団の利害を犠牲にしてでもデカン地方において断行していくことであった。彼の変わることのない目的は、少しでも可能性があれば自治的能力を有するいかなる地域でも併合することであった。アウラングゼーブは具体的政策の開始としてこのことを闡明しなかったかもしれないが、国内の辺境地域（internal frontier areas）への勢力拡大のパターンは明白に表れている」（同書310ページ）。リチャーズはここで、彼の研究上の生涯的探索概念と言ってよい辺境地域という言葉を使っていることが注目される。

⑧の文献は、リチャーズの1990年までの既発表論文をそのままの体裁で再録した論文集である。これらの再録論文のなかには②の論文、③の編書中の彼の論文、⑥の編書中の彼の論文、⑩の編書中の彼の論文もそれぞれ含まれている。これら以外に比較的初期の論文8編がこの⑧の文献には収載されており、これらの論文と今回私が用意した論著リスト中の作品とによってリチャーズの著作はかなりの程度まで網羅されているのではないと思われる。注(5)で指摘した第16回国際歴史学会議における彼の報告論文は、③の編書中の論文と対をなすもののようであるが、それがどこに発表されているのか私にはまだ定かではない。

次にリチャーズが死去の10年前に発表していた⑨の論文を取り上げ、彼が強い確信のもとに主張していたムガル帝国近世時代論を彼の所説を引用しながらやや詳しく紹介していくことにしよう。

「15世紀末から19世紀初まで、便宜的には1500－1800年の間に、人間社会はその広がりとは甚だしさにおいてそれまでに経験したことのない、いくつかの全世界的な変容過程（processes of change）を共有した。多くの歴史家たちとともに私はこの3世紀間を近世時代（the early modern period）と呼ぶ。私たちはこの時代をこれに先行する中世および19世紀20世紀の近代からそれぞれ区



別する」(197ページ)。リチャーズはこのように述べて、中世や近代と区別された近世時代を設定する。

「南アジア史にとっても、16世紀から18世紀までの時期に対して近世という用語を使用する方がムガル朝インド (Mughal India) や中世後期インド (late medieval India) あるいは植民地前インド後期 (late precolonial India) という用語を使用するよりもずっと道理にかなっていると私は信じる。そうする方が、インドは例外的であり特殊であり風変わりであり世界史とはどうも切り離されている、というように考えられてしまう程度を弱めてくれるであろう。私たちは南アジアの文化、文明、並びに社会をこのように適切に位置づけ、そうすることによって16世紀、17世紀、18世紀のインド史のもっと具体的で込み入った内容をよりよく理解できるように努めねばならない。私はそう確信している」(197-198ページ)。リチャーズの立場は、世界史的な普遍的時期区分のなかにムガル朝時代を位置づけ、その時代を近世とするところに特色がある。ここで述べているように彼は強い口調でムガル朝時代近世論を主張する。

では近世世界を規定するものは一体何であったのだろうか。リチャーズによれば、それは6つの顕著にして大規模な過程を経てもたらされたものであった。その第1は全世界的な海路の形成であった。第2はこの海路を活用した遠距離商業の発展と、それによる世界経済の興隆である。第3は日本の徳川幕府、ロマノフ朝ロシア、西欧の絶対主義諸国家、オスマン朝トルコ、サファヴィー朝ペルシア、ムガル朝インド、清朝中国といった大規模国家の発展と継続である。第4は世界人口の増加、すなわち、1500年の4億ないし5億から1800年の8億5千万ないし9億5千万に至るほぼ2倍化である。第5は生産を上げるための土地利用の増強である。そして第6は新大陸作物の作付けや火薬、印刷術といった新技術の普及である。これら6つの大規模過程は、16-18世紀の南アジアにすべて当てはまるものであった。但し印刷術のみは写本を尊ぶ南アジアでは19世紀初まで先送りされた、という(198-204ページ)。

リチャーズが⑨の論文で示していた近世インド史研究のための学問的姿勢は、次の2つの引用箇所によく示されているといえる。少し長くなるが、ここでそれら2箇所をまとめて紹介することにしよう。「以前の学者たちは、この時代



における変革のための外因的力を過大に評価していた。こうした偏向があったために1947年までのヨーロッパ中心主義的な学者たちによる南アジア史の叙述は不十分なものであったし、その後もなお不十分さは否めなかった。〈伝統的、オリエン特的〉南アジアはヨーロッパからの影響があったためにようやく〈進歩と近代化を果たした〉といった受動的な考え方に回帰するつもりは、私にはない。…私の立場は一貫して、ムガル朝支配下における前例を見ないような国家権力と政治的統一の発展こそが近世インド—ムガル期インドではなく—の規定的な特徴であって、世界の他地域と変わるところがないというものであった。今もこの考え方を変えるつもりはない」(205, 207ページ)。「私たちは植民地支配の産物である既存の知識をいったん側において、清新なまなざしで近世時代の新しい制度、新しい社会形態、新しい文化表現、新しい生産力について見なおしていかなくてはならない。また近世時代の亜大陸で広く見られた変化の動態を学際的に理解していくこと(cross-disciplinary understanding)を、困難があっても立ち上げていく必要がある。私たちは近世南アジア(ムガル期インドではない)の、よく統合された多分野の学問領域にわたる歴史研究(better integrated, multidisciplinary historical research)を巻き起こしていかなくてはならない。そこでは、研究者たちは特定の局地的、地域的歴史の諸特徴を超えて、もっと広い南アジア、さらに世界へと広がる叙述と分析に向かって継ぎ目なく移動していくこととなる。南アジアは非常に重要なところであるので、今後世界史が書かれる際には、それが東洋の骨董品を並べ立てた埃だらけの陳列棚に放置されるようなことがあってはならない」(209ページ)。

以上にかなり詳しく引用しながら紹介した⑨の論文は、それが発表された1997年以降のリチャーズ晩年10年間の彼の研究の姿勢や視点の方向性を差し示すものであったといえよう。但し⑩の編著は1978年刊行のものをそのまま復刻したものであるので、⑪以降の論著が彼の晩年のものに当たるということになる。そのなかでも⑬の『無限に広がる境界—近世世界の環境史』は700ページに上る巨冊であって、数多い彼の著作のなかでもライフワークに当たるもののように見受けられる。

この大著の冒頭で、1500年以降いかようにして、かつ何故に、各地域で経済

的生産性を誘発する世界経済が登場したのかという命題を立て、(a)ヨーロッパ近世資本主義社会の拡張主義的躍動と(b)ユーラシア横断的に重大な戸口に達していた人間社会に共通して見られる発展的進化という、(a)(b)2つの面の批判的な結合のうちにその回答はある、とリチャーズは指摘する(17ページ)。そして先ず最初にムガル帝国とオランダ共和国を取り上げ、次のように述べる。「17世紀において、インドのムガル帝国と西ヨーロッパのオランダ共和国は世界中で最もよく成功した国々に属していた。前者は南アジアにおける1000年のインド・ムスリム国家の産物であり、稠密な人口は亜大陸の莫大な生産性に恵まれた経済の起動力となった。一方、オランダの領土と人口は対照的にムガル帝国と比べて狭小に過ぎなかったが、オランダの寡頭政治体制は17世紀において最も裕福で最も活発かつ侵略的な貿易国を統治していた」(24ページ)と。

上に紹介したムガル帝国とオランダ共和国のほかに、台湾、明清の中国、徳川期の日本、英国諸島、ロシア、南アフリカ、西インド諸島、メキシコ、ブラジル、アンティル諸島、北米東部(毛皮と鹿皮)、シベリア(毛皮獣)、新大陸タラ漁、北洋鯨・セイウチ漁の14地方を加え、都合16の地域を研究の対象地域とした。そして第1章で論じたムガル帝国とオランダを除き、他の地域にはそれぞれ1章ずつをあてがっているが、各章の草稿ができあがると、それをそれぞれの地域を研究する専門家のもとに送って意見を求めた、とリチャーズは序文で述べている。素晴らしい方法であるが、彼のように極く限られた著者にのみ許容された方法であろう。⑪の論文で、世界的展望こそが重要であると論題に掲げているが、そうした課題を彼自身はこのような方法で果たそうとしていたのであった。

リチャーズの数多い編著のうち、⑫はその最後となったものである。この書には彼の単著論文と、ミーナ・バルガヴァとの共著論文との2編を収めている。単著論文「土地所有権の全世界化」の方は、近世初頭以来現代にいたる6世紀間における土地利用と所有権をめぐる大規模変化について検討した壮大な構想と内容の論文である。この論文は、リチャーズ没後に出版された⑭の『環境と世界史』と題した論集に再録されている。そしてこの論集の巻首には「亡きジョン・リチャーズに捧ぐ」との献辞が記されている。

### 3 帝国建設者アクバルの幼少年期

ムガル帝国の統治体制は、他の近世国家におけると同様、軍事体制がその基本に据えられていた。この軍事体制の特徴をもってムガル帝国を「弾薬帝国」(gunpowder empire)<sup>(6)</sup>ととらえる見方がある。ムガル朝は火器の独占的保有に努め、シャージャハーン時代に4万を数えた砲兵隊が包囲・攻城作戦用として重用されるとともに、7千の騎乗銃士隊も散開戦用部隊として擁され、これらの部隊がいずれも弾薬を使用していたからである。しかしながらムガル朝創設の当初より、その主力軍は弓矢、槍、刀剣で武装した騎兵隊であった。シャージャハーン時代、この騎兵隊は18万5千を数えた。

ムガル朝下の将校は高等官僚でもあって、民政の重要な職掌も同時に担うことになっていた。こうした軍人官僚制はマンサブダール (manṣabdār) 制度と称され、ムガル帝国の屋台骨をなしており、帝国の「鋼鉄製フレーム」と評されることがあった。高等軍人官僚たちは官位相当の俸禄と、配下の騎兵および軍用役畜を維持する費用とを合わせて国庫から支給されることになっていたが、支給方法としてこの総額に見合う地租額の見込まれる土地が彼らの領地 (jāgīr) として一定の期間を限って与えられ、その地の収租権が認められるという方式が定着した。ムガル帝国の主要財源は地租収入であった。しかしながらこのようなマンサブダール制は、時代が下るに従って帝国財政の最大の圧迫要因となっていく。

このような統治体制の基本が策定されたのは、アクバルの統治時代においてであった。ムガル帝国下のインド社会はさまざまな民族と社会集団によって構成される複合社会であり、そこに築かれた文化は複合文化であった。このような社会と文化を擁した帝国内においては宥和主義的政策が不可欠であることを、アクバルはよく認識していた。アクバルの近世的独裁君主としての政治家的資質については、これまでにしばしば議論されてきた。そうした議論の一つの出発点をなしたのは、『オックスフォード・インド史』<sup>(7)</sup>の著者として著明なイギリス人の歴史家ヴィンセント・A・スミスの『ムガル朝アクバル大帝』であった。<sup>(8)</sup>

スミスのアクバル論は、完結してまだ日も比較的浅い『アクバル・ナーマ』や『アクバル会典』、バダーウーニーの『諸史選粹』、ジャハーンギールの回顧録等のペルシア語史書の英語版を刻明に利用したり、ヨーロッパ人の旅行記やイエズス会士のインド訪問記などを多用した意欲的な研究書であるが、当時のイギリス歴史学界の影響や時代的制約を受けていたことも否めなかった。スミスのアクバル論の大きな特徴の一つは、アクバル文盲論を前面に出していたことである。この書に拠ってスミスの言うところを二、三紹介してみよう。

スミスによれば、少年時代のアクバルには後見人バイラム・ハーン (Bairam Khān) のはからいで何人かの高名な学者が教師としてつけられたが、いずれの教師もアクバルの教育に失敗した。「アクバルは著名な画家のミール・サイイド・アリー (Mir Sayyid ‘Ali) とホージャ・アブドゥルサナド (Khwāja ‘Abd al-Sanad) の指導のもとで絵画には多少手を染めてはみたが、書物には見向きもせず、アルファベットを学ぼうとさえもしなかった。アーグラ滞在中のアクバルは鬪象や、チータを使った鹿狩りのような激しいスポーツにのみ関心を向けていた。…アクバルが伝統的な教育方法に関心を向けなかったため、彼の教育はすっかり放棄されたかという、そういう訳ではなかった。彼は自分のために読み聞かせてくれる者はいつでも招じ入れた。その上、彼は人並みはずれた鋭い記憶力を有していたので、耳から仕入れた知識を持つことができた。こうして彼は普通の人々が知識を目から得ると同じように、耳から取り入れていた」(同書、41ページ)。

スミスはまた言う。「アクバルが少年時代、いかに勉強嫌いで読み書きの初歩さえも習得しなかったか、ということについてはすでに指摘した。アクバルの幼稚な怠け癖がもたらした最大の損失は、訓練の規律が欠如したことであった。彼は決して無知な人物ではなかったけれども、その知識は体系的な整合無しに無計画的にかき集められたものであった。彼はまるで超人のような記憶力を有しており、その記憶力によって自分に読んでもらった書物の内容を正確に記憶に止めることができたし、各行政部局の事業の詳細、さらには何百に上る個々の鳥や馬、象の名称を正確に覚えることができた。行政面においては、原則を踏まえた上で微細な事柄に至るまで細心の注意を向けるという類いまれな

能力をもっていた」(同書、337ページ)。

スミスはつづけて、さらに次のように言う。「いろいろな分野にわたる知識を全うしたアクバルのような人物が本当に文盲であったとは考えられない。彼はひとえに目よりも耳から書物の内容を学び取ることを好み、それを自分が有する桁はずれの記憶力に委ねることができたのだった。この記憶力は、手書きの覚え書きが用意されていても決して弱まることはなかった。アクバルが議論のテーマについて正確かつ明解に主張するのを聞いた者は、誰もが彼を文学上の該博な知識と深淵な認識を備えた人物と信じ込み、彼が文盲であると思うようなことは決してなかったであろう。アクバルは自分が読み書きのできないのを恥じるというようなことはなかった。彼と前後する時代の数多くの著明な王侯たちも同様であったからである」(同書、338ページ)。

以上のようなスミスの所論を見てみると、彼の主張が単純なアクバル文盲論ではないことは明らかである。スミスは、アクバルが幼少時に読み書きを極端に嫌がり拒絶状態を続けていたこと、しかしながらアクバルが朗読を聞くことによって知識を獲得する術を身につけ、並外れた強靱な記憶力でもって各分野にわたる微細に至るまでの膨大な知識を有していたことを認める。こうしたアクバルの学習方法をスミスは「幼稚な怠け癖」と評し、それがアクバルに「訓練の規律の欠如」をもたらしたと断じた。しかしながらスミスは、誰もがアクバルを「文学上の該博な知識と深淵な認識」を有した人物と思い込むほどその道に通じていたことを認め、アクバルが単純な文盲論ではとらえられぬ人物であったことをはっきりと指摘していた。

この問題に関し、『オックスフォード・インド史』よりも18年遅れて刊行された『ケンブリッジ・インド史』第4巻の記述はどのようなものであったのだろうか。参考までにそれをここに紹介しておこう。「アーグラにおいてバイラム・ハーンが一番の心配の種は、自分が後見人となっているアクバルの教育であった。アクバルは勇壮な肉体的訓練や野外運動には熱心であったが、活発な知性に恵まれていたにもかかわらず、著名な伝記作家たちの言う＜通常教育装置＞に注意を払うよう彼を仕向けることは不可能であった。詰まるところ、アクバルは読み書きを学ぼうとしない怠惰な少年であり、読み書きいずれの技

をも身につけることはなかった。…一人前の男になると、アクバルは歴史や神学、哲学の諸々の作品の朗読を精力的に聞き取って幼少時の情情をできる限り償おうとした。しかしながら、こうした点で彼が他人の手助けなしに済ますことのできなかったことは望ましいことではない。なぜなら記憶力はどれほど鍛えられたとしても、そしてまたアクバルの記憶力は生来並はずれたものであったとしても、その記憶力は彼が文盲であることによって発達したものであって、照合する能力（power of reference）を提供するものでは決してありえなかったからである<sup>(9)</sup>」。

ここに紹介した文章は、『ケンブリッジ・インド史』第4巻の編者の一人ウルズリー・ヘイグがアクバル治世時代初期を扱った第4章のなかで述べているところの一部である。この文章によって、幼少期アクバルの教育問題に関する彼の考え方は、スミスの考え方と同じくアクバル文盲論の立場に立つものであったことは明らかである。このような幼少年期アクバルの教育問題に関するスミスおよびヘイグ流の考え方は、インドとパキスタンの独立後もなおしばらくは大きな影響力を維持し続けていたようだ。この問題に関し文盲論にはっきりと異を唱えたのは、マカーンルール・ローイチョードゥリーの論文であった<sup>(10)</sup>。この論文で著者はいろいろな典拠を羅列しながら、アクバルが実際には読み書きのできたことを論証しようと努めている。そうした後にローイチョードゥリーは、アクバル文盲論が流布した背景に、アブル・ファズルがアクバルをイスラーム預言者ムハンマドと同様の預言者的地位におくことを望んでいたために、アクバルを読み書きのできぬ人のように記していた、という点のあったことを指摘している。だがこの点は、彼の批判する当のスミスが既に指摘していたこと<sup>(11)</sup>であった。

アクバルの教育問題に関する論争について、現代の歴史家たちはどのように見ているのであろうか。管見の限り明瞭な指摘は少ないように思われるが、例えば先に紹介したハルバンス・ムキアは次のように見る。すなわち、アクバルの文盲はその知性や理性が神性を帯びていることを世に広めようとしたアブル・ファズルの構想によるところが大きい、と<sup>(12)</sup>。これは明らかにスミス流の考え方の枠のなかに入る見方である。

#### 4 幼少年期のアクバルは難読症であった

本節のはじめに、幼少年期のアクバルの簡略な年譜を主に『アクバル・ナーマ』に拠りながら紹介することにしよう。

1542年10月15日 アクバル生誕。

1543年11月 フマーユーン一行ペルシア亡命に向かい、アクバルはカンダハールの叔父ミールザー・アスカリー (Mirzā ‘Askarī) のもとに人質として置き去りにされる (アクバル満1歳余)。

1544-1545年冬 カーブルの叔父ミールザー・カームラーン (Mirzā Kāmārān) のもとに移される (2歳3ヵ月ごろ)。

1545年11月15日 フマーユーン、カーブルに入城しアクバルと再会 (3歳1ヵ月)。

1546年後半 フマーユーン、カーブル城から追放され、アクバル再びカームラーンの人質となる (4歳前)。

1546年10月8日 アクバル、カーブル城の城壁から晒し出され、包囲中のムガル軍による砲撃の危機に合う (4歳に7日未満)。

1547年4月27日 カームラーン、カーブル城から逃亡し、アクバルはフマーユーンと合流 (4歳6ヵ月)。

1547年11月 アクバル、初めて家庭教師の指導を受く (5歳1ヵ月)。

1550年前半 カームラーン、カーブルに帰還し、アクバル三たびカームラーンの人質となる (8歳前)。

1550年後半 フマーユーン、カーブルを奪還しアクバルと合流 (8歳前後)。

1551年末ごろ アクバル、ガズニー知事に任命される (9歳2ヵ月余)。

1555年7月23日 フマーユーン、デリーを奪回 (12歳9ヵ月)。

1555年11月 アクバル、パンジャブ総督に任命される (13歳1ヵ月)。

1556年1月24日 フマーユーン、デリーの図書館階段より転落して死亡 (13歳3ヵ月)。

1556年2月14日 アクバル、ムガル朝第3代皇帝に即位 (13歳4ヵ月)。

この簡易年表を一瞥しても分かるように、アクバルの幼少年期は父帝フマー



ユーンと叔父たちとの反目、対立のはざまに我が身を翻弄され、父母たちのペルシア亡命中、叔父たちの人質となって数かずの危機を体験せざるをえなかった。とりわけ1546年10月のカームラーンの命令によるカーブル城の城壁からの晒し出しは、ムガル軍砲兵指揮官のとっさの機転によって砲撃が中止され、アクバルの命が奇跡的に守られるに至った事件であった。この事件に代表されるように、幼少年期のアクバルは反父帝的気風の渦まく非親和的、敵対的環境のなかで過ごすことを余儀なくされたのである。このような環境のもとでアクバルは自分の身の周りの事象に対しては旺盛な関心を抱くようになるが、正規の家庭教師の指導を受けるようになったのは幼年期末期のころのことで、皇子の教育としては明らかに遅い。

少年期のアクバルは否応なく現実の政治世界と関係をもたざるをえなくなった。すなわち9歳過ぎには名目的とはいえガズニー知事に任命され、13歳過ぎには後見人バイラム・ハーンの補佐を得てパンジャーブ総督に任命された。アクバル13歳と1ヵ月のときのことであった。その2ヵ月後には父帝フマーユーンが急逝し、ムガル朝第3代皇帝に即位することとなる。時にアクバルは13歳と4ヵ月の少年であった。このようにアクバルは打ち続く危機と急激な事態の転変の交差するなかで幼少年期を過ごすことを余儀なくされ、あろうことか、いきなり皇帝位に登ることとなったのである。

アクバルの家系は文人の家系としても著名であった。『バーブル・ナーマ』を遺した祖父のバーブルは言わずもがな、父帝の異母妹グルバダン・ベグム（Gul-Badan Begum）は『フマーユーン・ナーマ』を著している。またアクバルの子孫にも文人的才能を有した者が少なくない。アクバルとて著作品を遺したとしても決しておかしくはなかった。だが現実はその反対で、アクバルは読み書きが苦手であった。彼は生来、知的にも肉体的にも優れた素質に恵まれていた。しかしながら、私の見るところ彼は先天的に読み書きの習得面において困難性を有していた。ディスレクシア（dyslexia）と呼ばれる障害である。我が国ではこの言葉に、読書障害、読字障害、難読症、失読症などの訳語が当てられることがある。ディスレクシアは、1970年代以降アメリカにおいてその研究と施策が発達した学習障害のうちの一つである記述言語分野の障害であっ

て、読むこと、書くこと、正しく綴ることの面において困難性が見られるものとされている。<sup>(13)</sup> アクバルは幼少時に、記述言語分野における学習障害であるディスレクシアと向き合うことを余儀なくされていたのであった。

幼少期にディスレクシアであった人が青少年期にそれを克服して、天才的な才能を発揮するに至る場合が、しばしば存在する。しかしながらアクバルの場合は少年期を抜けきらないうちに登極せざるをえなくなり、いきなり熾烈な軍事的闘争と政治的課題のなかに投げ込まれていった。登極の年、スール朝残党勢力を率いたヘームー（Hemū）将軍を第2次パーニーパト戦で打倒はしても、軍事的、政治的課題はなお山積していた。しかも一方では強大な権力の行使可能者となった。このような立場に立つにいたったアクバルは、勅令や外交文書等に自署することは問題としなかったとしても、膨大な行政関連文書や歴史書、文学書等に関しては、人並み外れた記憶力に依拠しながら従前同様に朗読を聴き取るという方法を継続していくことに違和感を覚えることはなく、結局この方法を生涯の習慣として続けていったのである。

なお一言付け加えておくと、ヴィンセント・スミスが指摘し、ローイチョウドゥリーが受け売りし、現在のハルバンス・ムキアがなお主張しているような、アクバル文盲説の来源をアブル・ファズルの作為に求める考え方に、私は賛成ではない。

## おわりに

小稿では、第1節において近年の注目すべきムガル朝時代史の研究として著名な5人の研究者たちの研究書をそれぞれ紹介し、第2節ではそのなかの一人ジョン・F・リチャーズのムガル帝国近世時代論を彼の所説を引きながら紹介した。また第3節では、ムガル帝国の統治体制の実質的な創設者となったアクバルの幼少年期に焦点を当て、多難と危機、孤独と激動に耐えながらこの時期を過ごさざるをえなかったアクバルの教育問題について触れ、第4節では、幼少年期のアクバルが実は学習障害の一種である難読症（ディスレクシア）を蒙っていたことを明らかにした。

幼少年時代のアクバルは、スミスのような「勉強嫌い」で「幼稚な怠け

癖」のついた少年であったのでは決してなく、また『ケンブリッジ・インド史』が述べるような「読み書きを学ぼうとしない怠惰な少年」であったのではない。読み書きに努めようとしてもそれができない難読症の学習障害と向き合うことを余儀なくされた少年であった。アクバルは少年期を抜け出さないうちに、いきなりムガル朝の第3代皇帝に即位し、それまでの朗読聴取による知識・情報の獲得方法をそのまま維持していくこととなったのである。

最後に、リチャーズが強調したムガル帝国近世時代論に関連して簡単な付言をしておくことにしよう。我が国ではじめてムガル朝時代がインド史上の近世であると位置付けられたのは、宮崎市定著『アジア史概説』続編（1948年9月刊）においてであったと言えるであろう。そこでは、インドがムガル朝をもって近世史に入り、同時代の世界のあらゆる王朝を凌駕する豊富な財政を背景としてインド近世文化が展開されたことが指摘されていた。<sup>(14)</sup> 私のインド近世論は、リチャーズのような壮大な世界史的構想を背景としたものには及びもつかないが、1977年公刊の小著以来、折にふれてムガル朝時代がインド史上の近世に当たることを明らかにしてきている。<sup>(15)</sup>

## 注

- (1) 私の知りえたイトンの著書としては、他に次のようなものが挙げられる。
  1. *Sufis of Bijapur, 1300-1700 : Social roles of sufis in medieval India*, Princeton: Princeton University Press, 1978.
  2. *Essays on Islam and Indian History*, New Delhi : Oxford University Press, 2000.
  3. (Ed.) *India's Islamic Traditions, 711-1750*, New Delhi : Oxford University Press, 2003.
  4. *Temple Desecration and Muslim States in Medieval India*, Gurgaon : Hope India, 2004.
  5. *A Social History of the Deccan, 1300-1761 : Eight Indian lives*, New Cambridge History of India I・8, Cambridge : Cambridge University Press, 2005.
- (2) K.N.Panikkar, Terence J. Byres and Utsa Patnaik (eds.), *The Making of History : Essays presented to Ilfan Habib*, 3rd edition, New Delhi : Tulika Books, 2011, pp. 660-668. また最近「近代インドの思想家たち」第1巻として

次の書が刊行された。Prabhat Patnaik (ed.), *Excursus in History : Essays on some ideas of Ilfan Habib*, Modern Indian Thinkers 1, New Delhi : Tulika Books, 2011. これには18編の寄稿論文の他に、インドの高級紙 *The Hindu* の編集局長 Parvathi Menon による40ページに及ぶ包括的なインタビューなどが収められている。

- (3) 私の知りえたゴマンスの著書としては、他に次のようなものがある。
1. *The Rise of the Indo-Afgan Empire, c.1710-1780*, Leiden and New York : E.J. Brill, 1995.
  2. (Eds. with Dirk H. A. Kolff) *Warfare and Weaponry in South Asia, 1000-1800*, New Delhi : Oxford University Press, 2001.
  3. With Lennart Bes and Gijs Kruijtzer, *Bibliography and Archival Guide to the National Archives at the Hague (The Netherlands)*, New Delhi : Manohar, 2001. (この書の続巻として Lennart Bes, *Archival Guide to the Repositories in the Netherlands other than the National Archives*, New Delhi : Manohar, 2007 がある)
- (4) この他のムキアの論著として私の注目してきたものには、次のようなものが挙げられる。
1. *Historians and Historiography during the Reign of Akbar*, New Delhi : Vikas Publishing House, 1976.
  2. “Was There Feudalism in Indian History?” *Journal of Peasant Studies*, 8—3, 1981, pp. 273-310.
  3. (Eds. with T. J. Byres) *Feudalism and Non-European Societies*, London : Frank Cass, 1985.
  4. (Eds. with Maurice Aymard) *French Studies in History*, 2 vols., New Delhi : Orient Longman, 1988, 1990.
  5. *Perspectives of Medieval History*, New Delhi : Vikas Publishing House, 1993.
  6. (Ed.) *The Feudalism Debate*, New Delhi : Manohar, 1999.
  7. “Time in Abu'l Fazl's Historiography,” *Studies in History*, 25—1, new series, 2009, pp. 1-12.
  8. *Exploring India's Medieval Centuries : Essays in history, society, culture and technology*, Delhi : Aakar Books, 2010.
- (5) 本稿は2011年9月24日東京大学において行われた現代インド・南アジアセミナーにおける報告「ムガル帝国論」をもとにして作成されたものであるが、その際会場におられた大阪市立大学の脇村孝平教授からジョン・F・リチャーズが既に死去していることを教えられた。またその後、京都大学の杉原薫教授からもリチャーズが2007年8月23日、68歳でデューク大学教授の現職在任中に死去したとする資料の恵送を受けた。両教授の厚意に改めて深謝する。

私がリチャーズと会ったのはただ一度、1985年8月26日ドイツ連邦共和国（西ドイツ）シュトゥットガルト市で開催されていた第16回国際歴史学会議の大テーマ「インド洋」の部会において、その報告者集団の一人として壇上で彼と一緒にになった折だけのことであった。彼はこのとき“Precious Metal Flow into India: 1200—1500 A.D.”という報告を行い、また私にメモを渡してアメリカでの研究会に誘ってくれたが、結局それは果たせないままに終わった。しかし彼からその論著を通して受けてきた裨益は私にとって非常に大きい。

- (6) Iqtidar Alam Khan, *Gunpowder and Firearms: Warfare in medieval India*, New Delhi: Oxford University Press, 2004.
- (7) Vincent A. Smith, *The Oxford History of India*, Oxford: Oxford University Press, 1st edition, 1919, 2nd edition, 1923. 『ケンブリッジ・インド史』とは違って、『オックスフォード・インド史』はヴィンセント・スミスが初版、第2版ともに単独で執筆した。彼はまたインドの美術史書も著していた。Do., *A History of Fire Art in India*, Oxford: Oxford University Press, 1911.
- (8) Do., *Akbar the Great Mogul 1542—1605*, Oxford: Oxford University Press, 1st edition, 1917, 2nd edition, 1919.
- (9) *The Cambridge History of India*, Vol. IV: The Mughal Period, ed. by Wolseley Haig and Richard Burn, Cambridge: Cambridge University Press, 1937, pp. 75-76.
- (10) Makhanlal Roychoudhury, “Akbar Was Literate,” *Indian Historical Quarterly*, Vol. 32, 1956, pp. 81-89.  
著者はMakhan Lal Roy Choudhuryという自分の名前の表記法で *The Din-i-Ilahi or the Religion of Akbar*, Calcutta, 1941, 2nd edition, 1952, reprint, New Delhi, 1985なる著書を発表している。
- (11) スミスは前掲書の注記で、「イスラーム教徒たちは自分たちの預言者が文盲であったことをもって、彼が神の使徒であったこと並びに彼の受けた啓示が真実であったことの証として誇りとする。アブル・ファズルはこの論拠をアクバルの場合に適用している」と述べていた。Smith, *Akbar the Great Mogul*, pp. 338-339, n. 3. ローイチョードゥリーはスミスのこの注記内容をそのまま踏襲しているのである。なお一点指摘しておけば、上記の注(10)で紹介した彼の著書はインテグリティ度の低いものであり、学術書としては依拠し難いものである。
- (12) Harbans Mukhia, *op. cit.*, p. 43, n. 28.
- (13) ‘Learning Disabilities,’ *Encyclopedia of Educational Research*, 6th edition, Vol. 2, New York, 1992, pp. 724-732; *Encyclopedia of American Education*, 2nd edition, Vol. 2, New Yoek, 2001, pp. 610-611. *Encyclopedia of American*

*Education* では、記述言語分野の障害の他に会話言語分野、算数分野、推論分野それぞれの障害を挙げ、学習障害に都合これら4種の範疇のあることを紹介している。

- (14) 宮崎市定『アジア史概説』続編、人文書林、1948年。『宮崎市定全集』18、岩波書店、1993年、238, 274ページ。
- (15) 近藤 治『インドの歴史—多様の統一世界』新書東洋史 6、講談社現代新書、1977年、第5章「インド史における近世の推移」。同『インド史研究序説』世界思想社、1996年、第2部「近世インド社会論」。Osamu Kondo, *The Early Modern Monarchism in Mughal India, With a Bibliographical Survey*, Kyoto : Shoukadoh, 2012, pp. 224-225.